

論文

児童生徒の社会的自立を目指す 規範意識と実践力の育成

本 間 研 一

Setting Morals Standard and Fostering Moral Behavior for
Social Independence in Elementary and Secondary Education

HONMA Kenichi

1. はじめに

「これまでの価値観が揺らぎ、自信喪失感や閉塞感が広がっている。青少年が夢や目標を持ちにくくなり、規範意識や道徳心、自律心を低下させている。」(平成15年中教審答申)

最高裁の判決文の中に「規範意識が目覚めてきたので」死刑を無期懲役に減刑するというのがあった。また、全国市区町村教育長対象の調査の中で「道徳や社会性を身につける」がもっとも力を入れたい分野であった。(豊かな心を育てる「社会性育成」力—高階玲治)

社会秩序維持のための規範意識の育成は社会の強い要請となっている。

中学校の道徳の内容の中では、「主として集団や社会とのかかわりに関すること」で、次のように示されている。①自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し、協力し合って集団生活の

向上に努める。②法の精神を理解し、自他の権利を重んじ義務を確実に履行するとともに、公德心を持って社会の秩序と規律を高めていくように努める。

人間は社会的な存在である。ある特定の血縁・地縁の中で生まれ、成長し、学齢になれば学校という社会集団の一員に属し、家庭や学校を取り巻く地域社会との関わりも次第に強くなっていく。さらに国家や国際社会という広い社会の存在を認識し、それらの中で生きている自分を理解するようになる。

規範意識にも「不易と流行」がある。人間としての最低限のマナーやルールはいつの時代にも必要なものであるが、情報が氾濫し、携帯を始めとする通信機器の目覚ましい発達には新たなルール作りを必要としている。校則で現在規制されている事が多い茶髪やピアスも時代がたてば一般化するかもしれない。規範を破ることは悪いこととされているが、逸脱行動にも意味や意義があるものがある。ギャングエイジは第一次反抗期であり発達段階の一つである。自分が所属していると思っている集団（準拠集団）内での規範がその年頃では最優先するのである。

2. 社会や集団の規準を主体的に守ろうとする規範意識と実践力はどのような指導方法で育成できるのか

集団を維持し、集団の目標に向けて生き生きと発展させるには、何よりもその構成員一人一人の共通理解の下に集団の規則を尊重する姿勢が大切である。規則は個人の自由を束縛するものでなく、集団の規則があってこそ集団の秩序や個人の自由が保障されるものである。「規範（Norm）」とは、われわれの評価作用が必ず従わねばならない規準のこと」（哲学辞典）である。

人は一人だけで生きられるものではない。生まれてから死ぬまで誰かの世話になり、また、逆の立場にもなる。したがって社会という枠組みの中

で他人との間、または組織の中で規範を創り、守っていくことは大切なことである。

「赤信号みんなで渡れば怖くない」などという大人の規範意識の低さが子供の社会に反映している。規律に挑戦する流行語が流行れば、それに感化され、全体への影響や迷惑を顧みることの無い軽率な行為が少なくない。また、子どもの生活体験の少なさがさらに規範意識を低いものにしている。生を受けたばかりの子どもは利己的で非社会的な存在であり（性悪説）、そのままでは社会生活に適合することはできない。乳幼児は家庭や社会から権威的に基本的なしつけを受けることで、初歩の規範意識が身に付く。最初は親の模倣から始まり、集団への同調になり、自立していく中で新たな規範を獲得する。

模倣・同調から内在性・自立性へ「社会は個人によって形成される、集団意識の生成は、個人間の接触（コミュニケーション）が母体となっている。」（スペンサー）

「自律の基礎は3歳までの家庭教育にある。」（堺正之）家庭や地域社会の道徳規範に従うことで過剰な衝動に惑わされることから免れることができ、絶えざる自己決定を免除される。家庭は教育の原点であり、すべての教育の出発点である。豊かな情操や基本的生活習慣、家族や他人に対する思いやり、善悪の判断などの基本的倫理観、弱者への配慮の重要性、社会的マナー、自制心や自立心を養う上でも重要な役割を担っている。自由には規律と責任が伴うこと、個と公のバランスが重要であるとの自覚の下に、社会生活を送る上で人間としてもつべき最低限の規範意識を青少年期に確実に身に付けさせる。それとともに、自律心、誠実さ、勤勉さ、公正さ、責任感、倫理観、感謝や思いやりの心、他者の痛みを理解する優しさ、礼儀、自然を愛する心、美しいものに感動する心、生命を大切に作る心、自然や崇高なものに対する畏敬の念などを身に付ける教育を重視する必要がある。

児童期には所属集団による規範が重要で友人関係との同調性が高い。成

長し自立心が芽生えるとともに内面への関心が高まり、家族や学校から離脱し、新たな規範の創造へと向かう。きまりに対して、自分なりの考えをもち、自治的な活動に主体的に参加する「規範の内面化」が図られる。この純粋な存在の中に社会的存在を形成し、体系的に社会化していくという営みは教育を通してなされなければならない。母校に対する帰属意識が強ければ、母校を傷つけまいとする意識が働き、自然に規範意識が身に付く。行動を道徳に照らすということがある。法律で罰せられるから万引きをしないのではなく、万引きが悪であるという道徳心が働くから万引きをしないのである。ペナルティーがあるからしないのではなく、人間として、してはいけないと思うからしないのである。

規範に伴う報奨と罰の体系

問題行動は過去の学習の失敗であるから罰によって治療し、賞によって新しくより良い行動を学習することで、すべての問題行動は治療できるという「行動主義」の理論がある。校則に対する安易な認識や態度が従来保たれていた校内の規律や良い伝統を乱す。「明るく楽しい学校」を目指している大半の生徒が校則を破る生徒を注意できない。規律を守ることがどれだけ大切な意味を持つかを十分に認識させたい。

規範の遵守を動機付ける。集団は成員相互の協力や助け合いがあって維持されるものであるからおたがいの暖かい人間関係を大事にして励ましあうという協力関係を作り上げていくことの大切さに気づかせる必要がある。

教育的に規範を内面化させるには、個々人の社会化への正当性——叱責・ほめる等を繰り返す、自然に身に付けさせる。デュルケムは、「逸脱は正常な行動の一部分——痛み・苦痛、犯罪のある社会も社会である」と言っている。校則違反も成長の一過程である。

規範領域—境界領域—逸脱領域

他人が逸脱し罰を受けるのを見ることで優越感を持つ。境界領域の人間

が逸脱に行くか規範を守るかは、それを見ることで反面教師になる。

逸脱行動は自律意識の高まりであり、頭ごなしに規制するものではない。校則にあえて反発するのも自律意識の高まりであり、心身ともに大人になろうとしている証拠でもある。しかし、大学生の感想によれば、校則が厳しいほうが社会に出た時に、それまで以上の規範に慣れることができるし、子どもが大人になっていく中で自然にやっではいけないことが理解できる、教師が秩序を守らせる厳しい姿勢も必要であると言っている。校則は人格形成時期における子どもたちに規範意識を身につけさせる重要な手段である。教師自身にも高い社会的モラル、教師という仕事に対するプライド、生徒に対する教育愛などが求められている。学校教育が社会の文化的所産を伝え学ばせる場であることを考えれば、児童生徒にとってある意味でストレスフルな場である。物事や時間にしばられ、自分を抑えようとすることはストレスがたまり、反発したくなる。学校が子どもたちに与える影響は非常に大きい。制服や頭髪などの外見的な規制ではなくモラルやマナーを教える、内面の育成が重要である。やみくもに締め付けるのではなく、状況に応じた規制が子どもの人格形成に大きな役割を果たす。教師は生徒を信頼の目で見つめ、逸脱行動も生徒の個性であると認めながら信頼関係を構築していくことが大切である。規則とは多くの先達はその社会のことを思って作って、継承してきたもので尊重すべきものである。しかし、社会が変われば変らねばならないものであるのに、その改訂には非常に大きなエネルギーを必要とする。

ソーシャルスキル（人付き合いの技術）トレーニングの利用について、相川充（学芸大学）は以下のように考えている。

人との付き合い方について、親兄弟、教師や友達から直接口で言われたり（言語的教示）、自分で実際にやってみて誉められたり叱られたりしながら（オペラント条件付け）、他の人の振る舞いのまねをして（モデリング）、繰り返しスキルを実践することで（リハーサル）、特定のスキルを自分のものにしていく。規範意識の確立にも同様の手法が役立つ。

デュルケムが言うように、創造的な社会は逸脱行動から生まれるともいえる。戦国時代のバサラ大名や織田信長が既成の権力に挑戦し、新しい価値観を構築したように、従来の規範を守るだけでは進歩は生まれない。

望ましい集団を作り、教師が子どもたちとともに行動することが実践力を高めることに繋がる。学校行事などの中でともに活動することの中から自然に規範意識が身に付くのである。協同社会の中で、組織維持の規範は必要だが押付けて身に付くものでもない。ホームルーム活動の中で、ソーシャルスキルの育成法やエンカウンター、疑似体験など、「なすことによって学ぶ」特別活動の実践によって規範意識を身に付けることができる。

3. 規範意識と実践力の育成に向け家庭や地域とどのように連携すればよいか。

日本人は西欧的な意味での規範意識を持たなかったのではないか。ルーズ・ベネディクトが、日本人を「恥の文化」と規定したように、村落共同体や都市の五人組など、お互いの目がお互いを監視することで秩序維持を図ってきた。高度経済成長などにより急激な都市化が進み、村落共同体的なつながりが薄れ、お互いを恥で制御するシステムが崩壊してしまった。これからの社会を秩序あるものにするためには、家庭や地域が大きな力を発揮する必要がある。家庭で行わなければならないしつけが学校に委ねられ、地域の大人が子どもの教育に関わらなくなって、規範意識が問題にされるようになった。

「徳性の獲得に影響を与えたもの」という日米の高校生対象の調査では、12の項目の中で、米国の高校生はほとんどの項目で、父親や母親から影響をうけたと答えた生徒が50%を超えている。日本の高校生ではわずかに「一生懸命働く」という徳性を父親から受けたという54%のみである。日本の父や母は子どもの徳性の獲得にあまり影響を与えていないといえる。家庭で子どもとともに過ごす時間は諸外国ともそう変わりはないが、父親

と一緒に過ごす時間がアメリカ・イギリスに比べ日本は1.5時間すくない。しつけをする父親は日本では5割程度だが、アメリカ・イギリスでは6割以上である。（「家庭教育に関する国際比較調査」平成5・6年度文部省）家庭教育の重要性が再認識されている。

学校が楽しいと感じている中高校生が8割以上いる。（「青少年の生活と意識に対する基本調査」総務庁）現在の学校教育が間違っているとはいえない。基本的に学校は楽しいところであるべきである。だが、私が教えている大学生の多くは高校では厳しい方が良いとアンケートで答えている。その方が将来、社会でのルールに早く順応できると言っている。

校則を遵守させることで集団の秩序維持のための基本的なルールを身につけさせる。自由とルール無視とは違う。豊かな人間関係樹立のために挨拶や思いやりなど他との関係を円滑にするルールも身につける必要がある。孔子が言う「恕」（自分がしたくないことは人にもするな）の気持ちが重要である。クラスの目標や個人の目標を立て、目標に向かって努力する、クラスの友達と同じ目標を目指す気持ちは社会へ出てからも重要である。地域では、自然体験が少なくなり、自分の家の中で遊ぶ子どもが半数近くになっている。近所のお祭りや子ども会、町会の運動会、道路や公園などの掃除、などに参加する子どももお祭り以外は減少している。地域社会や家庭が子どもにとっての生活体験の場でなくなっている。生活体験や自然体験、お手伝いと道徳観・正義感とは正の対比を示していて、特にお手伝いをする子どもの91%が、強い道徳観・正義感を持っている。（「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」文部省（平成10年））

静岡県青少年問題協議会は、県の施策として家庭の教育力の回復、地域の教育力の向上について提言をしている。また、神奈川県をはじめ多くの県の県警が規範意識の確立についてHPに掲載している。学校改革のために、学校評議員制度の活用も今後一層求められることになる。

学校が地域のセンターとして家庭や地域社会との連携を積極的に図っていく必要がある。

4. 規範意識を身に付けるために必要なもの

乳幼児期には親に、学校時代は教師に、社会へ出たら仲間や上司に教えられる。「教える」という語は、「愛（を）し」という形容詞から出た。（広辞苑）愛情を持って子どもと接することが子どもたちに社会の規範を守る気持ちを持たせる一番の早道だと思う。大人になるということはその社会の規範やルールを身に付けて社会的責任を負える人になる、つまり自分が生活している文化・社会を維持発展させるとともに次の世代を担う後継者の健全な育成に貢献できる人になるということである。

このことは取りも直さず、大人になるためには自分が期待する知識技能を認知し、受容する能力を発達させること、世界の他文化とかかわり調和していく能力を培うこと、自己を確立し他者と連携しつつ自己の責務をきちんと果たせる能力と責任を育てることが要求される。

「学齢人口の推移見込み」（平成14年1月）によれば、1990年に1160万だった中学・高校生が、2000年に860万、2010年には720万になる。急激な少子化が過保護を生み自立心の低下を招いているのではないか。何の職業にもつかないニートという存在が問題になっているのもその影響であろうか。

「学校でのきまりは守れるか」という、創価大2004年国際比較調査によれば、我が国の小学校における小学生の規範意識は、各国の小学生に比べてきわめて低いという結果が出ている。また、ベネッセ未来教育センターの調査によれば、中学生で「放置自転車に乗る、自室でタバコをすう、他人の傘を無断でさして帰る」などの項目が83年の調査より95年の調査のほうが約一割も悪くなっている。先生や親に反抗すること、学校をずる休みすること、パソコンで性的画面を見ることなどが米国や中国の高校生に比べ、日本が飛びぬけて多い。（「ポケベル等通信媒体調査」平成8年・日本青少年研究所）また、「努力や責任を伴うことはあまりやりたくない」が、ここ10年で倍増している（「生活者の価値観に関する調査」生命保険文化

センター) それだけ規範意識が低下したといえる。

一人でご飯を食べる子どもが3割を超える。(「国民栄養調査」平成9年・厚生白書) というのも、栄養面でも心配であるが家庭の教育力が低下していることにつながるのではないか。

家庭の教育力が低下していると思う理由

- (ア) 子どもに対して過保護・甘やかせ過ぎや過干渉の親の増加 66.7%
- (イ) テレビ、映画、雑誌などが子どもに及ぼしている悪い影響 50.5%
- (ウ) 子どもに対するしつけや教育の仕方がわからない親の増加 47.1%
- (エ) 子どもに対するしつけや教育に無関心な親の増加 44.4%
- (オ) 父親の存在感の低下 35.8%

{国立教育政策研究所内。家庭教育研究会「家庭の教育力再生に関する調査研究」(平成13年)}

家庭において規範は親から子へ、子から孫へと受け継がれてきた。今後とも規範を引き継いでいくことが家庭の重要な役割のひとつである。

国・地方公共団体が規範意識の育成に次のような施策を示している。

1. さまざまな集団への所属機会の提供
2. 青少年の多様な個性に応じた施策の推進
3. 乳幼児期の子どもを持つ親への働きかけ
4. 青少年健全育成のための新しい組織システム作り

他人と自分は違うから、他人に理解してもらえないのは当たり前。(養老孟司) いじめや学級崩壊、キレる子現象、不登校などの難しい問題に加え、今日の子どもは、これまでの感覚や価値観では対応が難しく、心を通わせにくい。開かれた学校づくりをさらに進め、「親や市民の学校参加は子どものためはもちろん、教師への支援、地域と連携した教育が期待できる。」(尾木直樹) といえる。(発達課題の理解と考え方-安達喜美子) 生涯教育の基盤としての、子どもの性格と態度の形成にかかわる、親をはじめとした家族の努力が期待されると同時に行政施策の面でも家庭教育への適切な援助が求められている。

教育の役割は、個人の能力を伸長し、自立した人間を育てることと国家や社会の構成員として有為な国民を育成することである。このような教育の役割と、個人の尊重、公共の精神など継承すべき価値は、しっかりと踏まえていくことが重要となる。

5. 今後の教育の見直しの主な視点

中央教育審議会では、「今後の審議において計画に盛り込むことが考えられる具体的な政策目標等の例」として、以下の点をあげている。

(1) 国民から信頼される学校教育の確立

- ①一人一人の個性・能力を涵養する教育の推進
- ②豊かな心をはぐくむ教育の推進
- ③健やかな体をはぐくむ教育の推進
- ④グローバル化・情報化等社会の変化に的確に対応する教育の推進

(2) 「知」の世紀をリードする大学改革の推進

(3) 家庭の教育力の回復、学校・家庭・地域社会の連携・協力の推進

(4) 「公共」に関する国民共通の規範の再構築

「公共」に主体的に参画する意識や態度の涵養の視点

日本人のアイデンティティ（伝統、文化の尊重、郷土や国を愛する心）
の視点、国際性の視点

(5) 生涯学習社会の実現

(6) 教育振興基本計画の策定

国民が国家・社会の形成者として、国家、社会の形成に主体的にかかわっていく態度を育成することが求められている。しかし、いろいろな社会の規準になじめない人が増えている。向こう側とこちら側との境が無くなった。本来映画やテレビ画面の向こうは、現実世界とは異なるものであったが、今では誰もが向こう側に行くことができるようになった。彼岸や此岸の境も不明確になり、生きていてもあちら側を考える人が増えてきている。

自分たちだけの基準を持ち、それがすべてだと考える人がふえている。家庭や学校、地域のクラブや町会などの地域社会のルールを守ろうとしない人たちが増えている。「インフラを担う自覚に乏しい東証」という日本経済新聞の記事があった。市場の資金を調達するには、東京証券取引所も昔の規準でなく、ゆるめたらという金融庁の助言に耳を貸さなかったことを評しての記事である。家庭における教育でも時代が変われば、変化する。所属する社会が変われば基準も変わるし、時代が変われば当然変わる。社会性を高めるとはつまり変化に対応できるということでもある。学級活動・生徒会活動・学校行事という「なすことによって学ぶ」特別活動の実践の中で、子どもたちに自己決定する機会を多く作り、自己有用感や自尊感情を持たせることが集団への帰属意識を高め集団規範意識を高めることにつながる。

規範意識の育成が時代の要請であり、学校がその中核となるという意識を持って、今後の教育に携わる必要がある。

規範意識にも「不易と流行」がある。家庭と連携しながらも教師が主体となって「不易」の部分に身につけさせることが重要である。また、子どもたちが積極的に地域活動に参加するよう促し、地域社会と連携を図り、時代の変化に対応した「流行」の部分についても規範意識を高め充実させる指導を定着していくことが今後の教育に強く求められているのである。